

りれ一随筆 ⑦⑩

島田医院(埼玉県与野市)

元木さち子

前回の岡本鈴美さんと、看護の道を共に学んだ衛生短大を卒業後、私は大学病院に勤務しました。そこでの看護婦1年生の経験の中で、診療と看護は対等な位置にあり、協力し合ってこそ良い看護ができることを学びました。やがて、看護の専門性が問われる助産婦になりたいというかねてからの夢が膨らみ、仕事と受験勉強のハードスケジュールを乗り切り、昭和54年、無事助産婦学校に入学ができました。

しかし、希望に胸膨らませて入学した助産婦学校の1年間で、祖母の死と血液疾患の発病という2つの大きな出来事に会い、自己を改めて考えさせられ、悩みました。不安定な心の迷いの中で国家試験を受けた私にとり、合格した時の喜びは人一倍でした。

こま切れ業務への疑問

助産婦として病棟勤務に入ってすぐ、治まっていたかに見えた血液疾患が再発しました。初めての勤務に追われて、自己看護の不充分さがたたり、後遺症が残ってしまい大変な1年となりましたが、“分娩を取りあげる＝助産婦”という第一目標を自分なりにクリアしました。

しかし、妊娠中の面識が全くなく、陣痛発来や破水と共に入院してきた産婦と挨拶もきちんとかわさないうまま、産婦にとって一番つらく、長い時を迎えさせ、ある人は陣痛室でワメキ！ある人は分娩室でウナリ！そして、褥室で1週間——このような施設分娩のスケジュールの中で“助産婦として、このような関わりでよいのか”と疑問がわきました。

私の考える助産婦業務は、妊娠診断時から始まり、妊娠中の予防管理・異常の早期発見や栄養・生活指導等を10か月の間、妊婦と共に積み重ね、分娩を迎えます。さらに、産後は母乳育児指導を通してフォローするという、母子管理をコアとした妊産褥婦管理を実践していくこ

とでした。しかしながら、助産婦としての基礎教育は受けたものの、その後、何も勉強をしていない自分に気付き、少しずつ講義やセミナーを受講したり、雑誌を読んだり、自己勉学に励みました。と同時に、妊婦との対話により、大きな勉強をさせてもらいました。そんな中で、大病院内での助産婦業務の限界を感じ、思い切って、現状では私の求める妊産婦への一貫した継続指導をしているといわれている母子センターに、職を転ずる決心をしました。どうせ変えるならと、住まい・環境など全てを変えて、北海道にある母子健康センターへ移動しました。

助産婦として視野を広げて

センターに勤務した当初、体験すること全てが今までの施設と違い、興味津々で希望に満ちていました。しかし、その思いもつかの間、母子健康センターでの助産婦業務が助産婦にとって、いかに厳重に注意を払い、考え、学び、判断しなければならないことかを知りました。母子健康手帳交付、妊婦相談、母親学級、個別夫婦退所指導。さらに、担当地区の全妊婦管理(家庭訪問)。それは、まさしく私の一番やりたかった助産婦業務全域でした。しかし、それは大変難しいものでした。助産婦学校時代の教科書の見直しから、専門雑誌の情報、月2回のケ

私の求め 助産婦活動

ースカンファレンス、また月1回の勉強会などを重ねて、学びを深めました。

センターでの入所分娩は、もちろん医師はいません。だからこそ、妊婦相談時の異常や、予想される異常を察知し、それに合った施設を紹介したりするなど、厳重なチェックをして、センター分娩をOKとしていきます。これは、病院施設ではほとんど医師が行なっていることですが、助産婦でも行なえることなのです。

産婦とは、妊娠診断、その後の母子手帳交付時からの付き合いなので、分娩進行中の精神的变化等が把握しやすく、その人に合った個別看護が実践できました。さらに、退所後の母乳育児。そして、1か月健診から断乳まで、フルに助産婦として生きていることを感じると共に、妊婦を一人の女性としてとらえ、そのライフサイクルの中で援助していくには、まだまだ不十分であり、さらに学ばなくてはいけないことが山積しているのを痛感させられました。

一方、このようなセンターでも、どんなに厳重に管理しても起きるハプニング、また特に早産児など、予防の限界があることを知りました。その頃、約束の2年間で切れ、帰省しなくてはならなくなりました。そこで帰省をきっかけに、さらに助産婦業務の視野を広げるため、NICU 看護の道を選びました。またそれと平行

して、若年妊婦にも関心が持たれ、思春期保健の領域を新たに学び始めました。

NICU最新医療の現場で

小児医療センターでは、母子センターの安泰な世界との大きなギャップに、何より目を見張りました。それと同時に、妊娠中の不十分な管理の結果、悲劇的な症例となってしまった患児に驚きました。今まで体験することのなかった種々のケース、たとえば染色体異常児・奇形児に始まり、VLBW・新生児仮死などを目の前にして、最新医学でもどうにもならない状況があることを、身にしみて実感しました。今までの自己助産録に、このようなケースがなかったことだけが、幸せだったと思いました。

NICU では、産科的立場と小児科的立場の違いを学びました。どちらがよいかは答えは出せませんが、私自身は、何よりも親子・家族が、微笑み・喜び・嬉し泣きができる看護援助を行ないたいと思いました。

* * *

現在は、私の求める助産婦活動が、実際の医療体制の中で実現できうと信じた開業医院で勤務しています。助産婦業務を遂行しようとすると、どこの施設でも限界はありますが、その限界を見極めて、一人の妊婦がすてきなマタニティーライフを過ごし、心身共に、そして社会的にも健やかな状態で分娩・出産・育児に臨み、女性として自己実現できるように、助産婦としてサポートしていくことができたかと思っています。長く遠回りをしてはきましたが、10年間で学んできた全てを活用し、親子・家族がしあわせに包まれる姿をこれからも見守り続けていきたいと思っています。

次回は、母子センター勤務時代に知り合った北海道の先輩、上杉恵利子さんにバトンを渡します。